
シロクロ

森上 木一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シロクロ

【Nコード】

N6300D

【作者名】

森上 木一

【あらすじ】

僕と彼女の出会い、それは白と茶色の猫との出会いだった。その猫の名前は…

僕が彼女と出会ったのは、巨大な横断歩道でもなければ、行きつけのバーでもない。家の近くの公園で、だ。

僕は猫を撫でていた。

元来闇雲に猫を撫で回す趣味は無いのだが、その日は毎日通る公園の隅で、白くて茶色の斑点をまぶした物体に妙に関心を抱き、近付いた。というのも、それが猫だと発覚してから思い出したのだが、数日前、迷い猫と称された猫が記憶にあったからだ。

僕は一旦家に帰り、チラシを持って再び外に出た。チラシには失踪中の猫の写真と、猫のものと思しき名前、飼い主の名前、連絡先が書かれている。なぜか飼い主の金田、という名前より、猫の「シロ」の方が、かなりでかい。

僕はチラシを持っていき、先程の猫と照合してみようと思ったのだが、すぐにその必要が無いことに気付いた。写真の猫は両耳共茶色いのに対し、僕が公園で見た猫は方耳だけが茶色だった。つまり別人ならぬ別猫、人違いならぬ猫違いだった。

踵を返し掛けた時、「そういえば」と思い、ドアを閉め家の外に立つ。そういえばあの猫首輪をしていたな、と。

特に意味は考えなかったが、気になったので見に行くことにした。公園も近いし、面倒にはなるまいと思った。

公園に着くと、誰かが引き止めていたかのように、猫は同じ姿勢のままで佇んでいた。

近付いて撫でる。警戒もなく頭を差し出してきたのでやはり飼い猫かと思う。首輪も付けている。首輪を何気なしに見ると、金色の文字で、「シオバラ ミズカ」と書かれていた。

シオバラさんの家のミズカという猫かな、と思う。猫に「ミズカ」とは人間めいてるな、とも思う。

「お腹空いているのか、ミズカ」猫の催促するような擦り寄りに僕はそう応答する。「ちょっと待ってるよ」家に牛乳ならあったかな。牛乳を探してる時ふと面倒を見過ぎかな、と思ったが、綺麗な猫で、何より清潔そうだし、擦り寄せられたのが新鮮で嬉しかったから良いかな、と思った。というのは建て前だ。何かしら下心、例えば心優しい人を演じたかったのかもしれない。

公園には猫と、猫を撫でる女性がいた。

牛乳を適当な皿に入れ公園に着いたはいいが、女性の存在はまるで想定外だった。僕が不在だったのはほんの少しの時間だったから、どこから切り取ってきて、そこに貼り付けたかの様に、その女性の出現はあっさりとしていた。

「この猫、自分の家に帰りたがってるよ」気の強そうな声がした。当然それが女性のものであると、すぐにわかった。馴れ馴れしい口調だが、見た目は年下のように見える。年上と言われれば、それはそれで頷ける。「私ね、この猫が考えていることがわかるの」

まさか、と思ったが、すぐに、ははん、どうやらこの女性は迷い猫を見つけたと思っているな、と意地悪く思い、先程の自分を棚に上げる。そして「そうですね」と言う。

「そう。思わず外に出ちゃって、縮こまってるみたい」

僕は喉元まで出掛けた言葉を飲み込む。「その猫は似てるけど違いますよ、ほらこのチラシを見て」と。

「シロちゃんお家に帰る？」彼女は猫に話しかける。合点した。やはり勘違いしている、と。シロとは正に金田さんの猫の名前ではないか。この猫の名はシロではなくミズカのはずだ。

こちら辺で種明かしかな、と思い、僕は「ミズカ、牛乳飲むか」と調子の良い声で言った。

だが、そこで女性が嘔き出した。全く予想外だらけだと思う。僕の方が反応に困る。

「ミズカって私のこと？」女性が言う。

「へ」

「ごめんね」隠しもしないでくすくす笑う彼女は、完全に少女だった。「実はさつきからあなたのことを見てたの」

「牛乳を汲むところ？」

「シロに会うところ」

「とすると」僕は考える。「とすると、君はミズカの飼い主？」自分で自分の見解がわからない。

「シロのね。私が瑞佳、塩原瑞佳。シロは私の猫」そう言っただけを撫でる。猫は気持ちよさそうに目を細める。

急に恥ずかしくなってきた。何だ、馬鹿にされてたのは僕の方が、と初めて気付く。

「本当はすぐ教えようと思ったんだけど、ちょっと面白そうだったから」

「恥をかいだ」

「でも『心優しい人』って感じだったよ」

「人の考えが読めるのかい」と聞きたくなる。全て笑い種にされている。シロが牛乳を舐めながらこちらをチラリと見て「馬鹿だねあんた」と言いたげな顔をした、様な気がする。

「何で首輪に自分の名前を書くんだ」僕は半ば負けじと、聞く。

「なくさないようによ。自分の持ち物には名前を書くでしょ」

これだけはつきりペットを「物」と言う人は珍しいな、と思う。だから「珍しいね」と言う。

「見ず知らずの猫に牛乳を与えようと思う方がよっぽど珍しい」瑞佳はそれがさも当たり前かのように、言う。「最近は物騒なんだから」と真面目な顔で。

「猫も何をしてくるか分からないからな。下手に近付いたら刺されるかもしれない」僕は調子を合わせようとするが、猫が猫の何をどう刺して来るかなんて、知らない。

「そういうこと。じゃあね、榎田さん」一瞬誰の名前を呼んだのかと思ったが、「榎田さん」なんて僕しかいないな、と気付く。そのまま彼女は「クロ、帰ろう」と言って、この間に「ミズカ」「シロ」

、と別称で呼ばれていた「クロ」という猫を抱えた。

あれ、まだ騙されてたんですか、僕は、とほんの数秒呆然とする。瑞佳の後姿を見やる。クロが彼女の肩越しに「ごめんね」と謝る様子は、まるでない。

それからしばらくして、勿論もう少し様々な経緯を経ながら、僕は付き合いを深めていった。

（後書き）

長編で使いたいな、と思う人物を短編で書きたいと思って出来たものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6300d/>

シロクロ

2010年10月8日15時55分発行